



First
Interview

01 日本生命保険相互会社 元大阪府警刑事部参事官

江幡 和志さん Kazushi Ebata

横浜大洋ホエールズ
1980-1983

1962年2月2日生まれ。茨城県出身。常北高(現・水戸桜ノ牧高常北校)から1979年ドラフト2位で横浜大洋ホエールズ(現・横浜DeNAベイスターズ)へ入団。1年目に左肩を故障し、1軍登板のないまま1983年に現役を引退。翌年、大阪府警に入庁し、後に捜査一課へ。2019年に警視正に昇任。2022年に退官後、日本生命保険相互会社で顧問を務める。

故障に悩んだ野球界から離れ 劣等感を払拭する第二の人生へ

プロ野球選手から、大阪府警の警視正へ——。珍しい経験だ。「私のような劣等生がまさか警察官になるなんて。現役時代は想像もしていませんでした」と、江幡和志は豪快に笑う。常北高(現・水戸桜ノ牧高常北校)から1979年ドラフト2位で横浜大洋ホエールズに入団した左腕は、1年目に肩を故障してしまう。4年間のプロ生活で1軍登板のないまま、1983年に現役を引退することとなった。

「まったく活躍できずに、いつクビになるのだろうと過ごしていた中、1軍のバッティングピッチャーを務めることが多くなっていました。横浜スタジアムで投げるんですが、ちょうどお客様が入って来る頃に球場を出ます。こっそり帰るあの寂しさは、今でも忘れません。プライドも何もズタズタになって、4年目に辞めました」

戦力外通告を覚悟しながら日々だったが、実際に通達されたときには頭が真っ白になったという。第二の人生をどう歩んでいくのか、具体的なプランはまったくなかった。

「茨城県出身なんですが、入団する際に町長や地元の名士の皆さんに盛大に送り出してもらいました。だから、活躍もしていないのに田舎には帰れません。どうせ辞めるなら、野球から離れたかったので、関東にも残りたくない。自分に何ができるのかわかりませんでしたが、妻の地元である大阪で一から出直そうと決めました」

しばらくはスーパーマーケットや鉄工所でアルバイトをし、「お金を稼ぐのは大変なんだ」と実感した。それと同時に、このまま続けていくことに違和感を覚えた。そんなとき、大阪府警の警察官である義兄に「警察官になるのはどうか」と薦められた。はじめこそ敬遠していたが、採用試験を受ける決意をし、見事に合格。警察学校は厳しいと聞いていたが、いざ入学してみると違っていた。

「プロの練習の方がきつかったし、上下関係も厳しかった。だから、それほど大変だとは感じませんでした。ただ、座学で刑法や犯罪捜査について学ぶのは苦労しました。でも、未経験者ながら、卒業まで柔道で負けたことはありません。そして、首席で卒業しました。22歳で入校しましたが、プロ野球選手は個人事業主なので職務経歴に含まれず、同じ22歳の人よりも給料が低かったんです。学校でいい成績を残すか、階級が上がれば給料も増えると聞いたので、必死に頑張りました。野球で年俸を上げることはできなかったけど、負けっぱなしの人生は嫌だ。その思いで、がむしゃらでした」



気力と体力を武器に 捜査一課で凶悪事件に立ち向かう

新しい環境に身を置くためには、現役中にすべてを出し切り、やりきったと実感してから次へ進みたいものだ。しかし、自由契約となる選手の中に、心からやりきったと思える人はどれほどいるのだろうか。

「よく悔いはありません、やり切りましたという人がいますが、それは1軍で長く活躍した方くらいじゃないでしょうか。実際は、言葉とは裏腹の思いを抱えている人がほとんどだと思います。自ら進退を決めるのではなく、途中でクビになるのだから、悔いがないなんてことはないはず。戦力外通告を受けても、野球にしがみついて生きていきたい思いも十分に理解できます。僕のように、すっぽり野球から離れられる人ばかりではありませんからね」

まったく別の世界へ足を踏み入れた江幡は、まず交番で2年間、留置所で半年間勤務した。今こそ元プロ野球選手の警察官は数名存在するが、当時は珍しがられたという。よくも悪くも目立つ存在で、背筋が伸びる思いだった。その後、捜査一課へと配属され、刑事としての人生が始まった。捜査一課は、殺人や強盗など凶悪事件を扱う。人質や身代金誘拐、立てこもり事件も対応してきた。そして、2017年に捜査第一課長に就任し、19年には警視正へ昇格する。

「社会の耳目を集めのような大きな事件の捜査指揮を取れたことは、いい経験になりました。その一方で、一番嬉しかったのは、身近な事件を解決して住民の方から『刑事さん、ありがとうございます』と言ってもらえること。凶悪事件の解決も重要ですが、身近なところで困っている人に手を差しのべられる刑事でなければいけないとあって働いてきました」

もっとも苦労したのは、泊まり込みが多く自宅に帰れないこと。捜査が長ければ、1ヶ月ほど帰宅できないこともあった。少し遡るが、警察官になりたての頃、プロ野球選手との大きな違いを感じたことがあるという。

「野球は結果を出さなければ戦力外になりますが、公務員は真面目に働いていればクビにはなりません。頑張っていても結果がすべての野球界。例え結果が出なくとも、一生懸命に取り組めば評価してもらえる公務員。楽に感じると口にしてしまい、上司に叱られた記憶があります」

勝負の世界で生きてきたからこそ、違和感だったのかもしれない。では、警察官の「結果」とは何か。

「犯罪が発生したら、犯人を捕まえるということ。極端に言えば、犯罪ゼロの街にするということです。それを目指さなければいけませんが、実現するのは困難ですよね。人員が足りず物理的に無理な場合もある。動きたくても、自分一人で勝手な行動をするわけにはいきません。野球もチームプレーですが、個人で結果を出していくし、年俸も人それぞれ。でも警察は組織として動くので、その難しさがありましたね」

困難な場面も訪れたが、プロ野球界で培った気力と体力が、自らの背中を押してくれた。ちょっとやそっとではへこたれない根性は最大の武器になったし、若いころは2、3日睡眠を取らなくても動き回れた。

「今のご時世、根性で乗り切るなんて言いづらいですが。生身の人間ですから、気持ちは大事ですよね。私の場合、はじめは知識や能力がなかったから、気力と体力で頑張ろうと思え



た。能力が低いからこそ、努力できた。古い考えかもしれないが、せっかく培ってきたものがあるのだから、あとは真摯に正面からぶつかっていくことが大事だと思います」

また、我慢強さも野球を通して身につけた苦労の賜物だ。現役選手にも備わっているはずだという。

「皆さんには、我慢する力があります。野球でも、セカンドキャリアでも、どんどん新しいことを覚えて新しい経験をしてもらいたい。自分に合っているかどうかは、やってみなければわかりません。我慢して継続することで、やっぱりこのプレーや仕事でよかったと思うことがあるかもしれません。第二の人生を歩むのは難しいですが、自分で取捨選択して頑張ってほしいと思っています」

2022年に退官後、現在は日本生命保険相互会社で顧問を務め、防犯全般の指導アドバイスを行っている。最近は野球関係の講演のオファーも増えた。

「自分の考え方やこれまでの生き様が、現役選手の役に立つのなら嬉しいことです。一番伝えたいのは、みんな選ばれてプロの世界にいるということ。だから1日1日を無駄にしないでほしい。大谷翔平選手みたいに能力の高い人と、そうでない人の差があります。努力をすればみんなが大谷選手みたいになれるわけではない。だけど、1本でも多くヒットを打って、1日でも長く野球をするためには、努力するしかありません。故障すれば腐りそうになるし、野球以外のことには気持ちが持っていないからそうになることもある。だけど、大勢の中から選ばれてこの世界に入った自覚を持ち、プロ野球選手でいられることを幸せに感じてほしい」

プロ野球を経験した社会人の大先輩からのアドバイスを、心に刻んでおいてもらいたい。





02 IT エンジニア Interview 兼 梨農家

矢島 陽平さん Yohei Yajima

読売ジャイアンツ
2016 - 2017

1990年6月16日生まれ。埼玉県出身。駿河台大から神戸サンズ、福井ミラクルエレファンツ、武蔵ヒートベアーズを経て、育成ドラフト7位で読売ジャイアンツへ入団。支配下登録を目指して2・3軍で登板を重ねるも、2017年に戦力外通告を受けて現役引退。現在はプログラマーとして働きながら、実家の梨農園も手伝い、二足のわらじを履く。

Second
Interview

未経験から二刀流へ 新たな分野にチャレンジ

プロ野球選手とプログラマーと梨農家。一見、何の共通点もないように感じるが、これが矢島陽平の職務経歴だ。駿河台大を卒業後、神戸サンズ、福井ミラクルエレファンツ、武蔵ヒートベアーズと独立リーグを渡り歩き、2015年育成ドラフト7位で読売ジャイアンツへ入団した。支配下登録を目指した右腕だが、ケガに悩まされ、2年後に戦力外通告を受ける。意外にも冷静だった矢島は、当時をこう振り返る。

「僕は独立リーグで長くプレーしたこともあり、野球を辞めた後のセカンドキャリアには現実味がありました。当時から、何をしようか漠然とは考えていましたね。そこで、独立リーグ時代の先輩に『今季までになるかもしれないから』と、セカンドキャリアについて相談しました。不謹慎かもしれませんのが、戦力外通告を受けてホッとしたところがあります。僕は育成選手として2年間しかプレーしていませんが、それでも、一球で勝負が決まる世界は厳しい。正直、これまで野球から離れられるのかと、少し救われたような気持ちになりました」

矢島の実家は埼玉県加須市で梨農園を営んでいる。現役時代に球団スタッフへ差し入れした際は好評だった。「美味しいよ。絶対に継いだ方がいい」との言葉が心に残っていた。祖父の代から60年以上続く矢島農園を失くすのはもったいない。戦力外通告を受けた後、実家を継ぐことを決めた。とはいえ、社会人経験のないまま家業に入って成功するのだろうか。そんな考えから、他の業界にも目を向けた。そして、知人の紹介により、IT企業へ足を踏み入れることになったのだ。

「はじめは、そんな職業があることすら知りませんでした。何の知識もなかったので、当初はエクセルなどを勉強するものだと思っていました。それが、理解できない英語が羅列してあって……これは何ですか?というところから始まりました。自分にできるのか不安もありましたが、『大変だけど大丈夫。きっとできるよ』と言っていただいたので、プログラマーに向けて動き出しました」

カリキュラムを受講し、実際にプログラマーとして働き始めたのは2018年の秋頃から。現在は株式会社LiNewと契約し、フリーランスのプログラマーとして、都内のIT企業で開発・保守業務を行っている。以前は都内に住んでいたが、コロナ禍でリモート業務がメインに。そこで実家に戻り、平日の早朝や週末は梨農家の手伝いに励む。将来的には自分が經營を継ぐために、畑に出て作業する毎日だ。二足のわらじ、まさに二刀流のセカンドキャリアを歩んでいる。



可能性を広げるのは 柔軟な発想とチャレンジ精神

新たな世界に飛び込むと、「プロ野球選手だったんですか」と驚かれることも多かった。その反応は、矢島が想像していたものとは異なる。「元プロとはいえ育成選手でしたし、驚かれるのは意外でした。だからこそ、変なことをすれば、元プロ野球選手の評判が下がってしまうとも感じました」と言う。そんな風に考えることのできる矢島は、仕事に対しても柔軟な発想を持ち、上手く向き合っている。実際に一般社会で働いてみると、これまで野球で培ってきた仕事を進める上で基礎となる能力、つまりソフトスキルがいかせていると実感した。

「プログラミングは専門職なので、仕事そのものは難しさもありますが、職場に慣れないということはありませんでした。やるべきことが、野球からプログラミングに変わっただけ。想像していたよりも、変化はありませんでしたね。もちろん、表面上はまったく異なる仕事です。でも本質は同じで、投球や打撃などプレーで表現していたことを、プログラミングに変えただけなんです。『PDCAサイクル』をイメージしてもらえるといいかかもしれません」

PDCAサイクルとは、Plan(計画)、Do(実行)、Check(測定・評価)、Action(対策・改善)の4つのプロセスを繰り返し、目標達成や業務改善に取り組む方法。難しく聞こえるかもしれないが、噛み砕いていくと、プロ野球選手ならばすでにになっていることだと解説してくれた。

「野球と働くことには共通点が多い。例えば、いい投球ができなければ次はどうすべきかを考えて試す、その繰り返しです。他の仕事も基本的には同じだと思います。上手くいかなければ、何がダメだったかを考える。仮説を立てて、新たに取り組むというサイクルです。野球をしていれば誰しも体験したことがあるので、自然と身についているはず。働いてみて、プロ野球選手ならではの強みだと実感しました」

いやいや、そんなことはないだろう——心の中でそう思った人も多いのではないか。確かに、矢島は思慮深く、考えを上手く言語化する能力に長けている。だが、「自分とは違うから。自分には無理だろう」と、突き放さないでほしい。これは決して他人事ではない、身近な話なのだから。

「僕も以前は『えい、やー』と勢いでやってきたタイプです。でも、プログラミングをやるようになってから、物事を順序立てて考えることで、言葉で表現できるようになりました。突き詰めていくという意味では、野球に近い。プログラマーとしてスキルを上げていくことが、お金を稼ぐことに繋がります。梨に関しても同じです。より良いものを多く収量することを目指しています。突き詰めていくことが魅力ですし、やりがいも感じる。僕の性格には合っているようです」

セカンドキャリアでも夢中になれるものに出会えた。それは幸運なことだ。どんな心構えをしていれば、異業種でも果敢に飛び込んでいけるのか。

「現役時代は野球に集中していても、セカンドキャリアは何とでもなると僕は思います。新しいことに挑戦する怖さもありますが、プロ野球での経験があれば大丈夫なはず。僕は3軍がメインでしたが、1軍の舞台でプレーした選手ならなおさらです。1軍で勝負しているのだから、別の仕事を始めてからの恐怖心なんて何てことないと伝えたいですね。普段から、



それくらいの覚悟を持って野球しているんですから。野球を辞めて、客観視するようになってからそう感じました。とりあえず、一步踏み出してみる。それが一番です。現役時代には実感しづらいかもしれません、皆さんが思っている以上に、プロ野球選手には人を惹きつけるステータスがありますから」

では、後悔のない現役生活を送るには、どんなことに気を付ければよいのだろうか。

「あえて言うならば、野球以外の時間をもっと有効活用すべきでした。僕はただ携帯を見て過ごす時間が多かったので、もったいなかった。本を読むとか、まったく違うことに取り組んでみるのもいいかもしれません。きっとセカンドキャリアにも役立つでしょうし、野球での気付きもあるかと思います」

矢島のキャリアを知り、柔軟な発想を聞けば聞くほど、選択肢は無限にあるのだと感じる。野球人生で培った気合と根性を信条に挑むのもよし、緻密さを発揮してこれまでとはまったく異なる分野に進むのもよし。まずは、何かに興味を持つことから始めてみてはどうだろう。そうすれば、自分でも知り得なかった可能性を引き出せるかもしれない。人生100年時代と言われる昨今、セカンドキャリアを充実したものにすることは大きな意味を持つ。

「まずはプログラマーとしてスキルを高め、将来的には梨農家を商売として成り立たせることが目標です。具体策はまだありません(笑)。ただ、プログラマーをやる中で習得した論理的思考を梨農家にもいかしたいですね。野球とまったく違うことをやるのは大変ですが、楽しいことも多い。年齢を重ねても、人生を楽しみながら続けていきたいです」

欲張りでもいい。あくなき欲望が、豊かなセカンドキャリアに繋がるかもしれない。





03 東京消防庁 大井消防署

荒張 裕司さん Yuji Arahari

北海道日本ハムファイターズ
2010-2016

1989年4月24日生まれ。大阪府出身。日本航空第二高等学校から愛知学院大学（中退）を経て、徳島インディゴソックスに入団。2年目の2009年に正捕手に定着し、ベストナインに輝いた。同年ドラフト6位で日本ハムファイターズへ入団。1軍出場は叶わず2016年に引退し、東京消防庁の職員試験を受験。現在は東京消防庁大井消防署に勤務する。

Third
Interview

感謝の気持ちを糧に猛勉強 自らの手でセカンドキャリアを開拓

東京消防庁の制服を身にまとった荒張裕司の一日は、救急車の点検から始まる。セカンドキャリアに選んだのは、救急車の機関員（運転手）。プロ野球選手に続いで、二度も夢を叶えたというわけだ。荒張は徳島インディゴソックスでの2年目に正捕手の座をつかむと、強肩強打を武器にベストナインを獲得。そして、2009年ドラフト6位で日本ハムファイターズへ入団する。1年目にイースタン・リーグで打率.296を残し、1軍定着を目指すも、出場することなく2016年に現役を引退した。

「引退後のことを考えるようになったのは、2015年に長女が生まれてからです。もちろん、プロ野球選手なので、より一層野球に励もうとも思いました。でも、成績が伴わなければ生活に不安が出てきます。このままでいいのかと、生活のことを第一に考えるようになりました」

家族が増えたことで、野球に対して、また将来に対する考えに変化が生じてきた。それは必然なのかもしれない。だんだんとセカンドキャリアを考える時間も増えていった。

「消防を目指そうと思ったのは、現役最後となった2016年の春頃。リトルリーグと一緒にプレーした幼馴染が、東京消防庁で救急車の機関員（運転手）をしていたんです。その友人の影響で、僕も救急隊に興味を持ち始めました。試合のない月曜日に公務員試験専門の予備校に通えたらいいなとも考えましたが、やはり野球界を辞めてからでないと難しかったですね」

そして、秋に引退を表明。球団スタッフとして残ることを打診されたが、決心が揺らぐことはなかった。すぐに気持ちを切り替え、次なる目標へと歩みを進めた。

「人間関係もよく、楽しいチームでした。僕みたいな実績のない選手にも、引退会見の場を用意してくださったファイターズには本当に感謝しています。だからこそ、絶対に試験に受かって東京消防庁に入らなければと思いました」

その後は地元の大坂に戻り、公務員試験専門の予備校に通った。だが、机に向かって勉強するのはいつぶりだろう。「辛かった……」と苦い表情を浮かべる。

「プロ野球選手でも、学生時代にしっかり勉強してきた人は大勢いるんでしょうけど、僕は本当に野球しかやってこなかった。だから、中学の教科書からやり直しました（笑）」

特に論文対策に力を入れ、辛抱強く机に向かう。そして翌年5月に試験を受け、猛勉強の甲斐あって見事に合格。「運がよかつただけですよ」と笑みをこぼすが、それは日々の努力が引き寄せた運だろう。新たな道を切り開いた。



プロ生活で培った財産は 高いコミュニケーション能力

入庁してから、まずは消防隊員として活動した。これに荒張は「僕の最大の勘違いだった」と苦笑いする。

「東京消防庁に採用されたら、消防隊員と救急隊員に分かれて活動すると思っていました。でも消防学校に入ってみると、はじめは消防隊員としての訓練ばかり。「あれ？」と思いました。実は僕、火も高いところも怖いんです。仕事なので消防車に乗ることもありますが、火事場に行くときは足が震えます。怖さは拭い切れませんが、最初は消防のポンプ隊員として活動し、そこで経験を積んで、救急車に乗れるようになりました」

荒張の目指す救急車の機関員（運転手）になるには、入庁後に試験・研修を経て取得できる救急隊員の資格と「機関技術」という緊急車両を運転する資格が必要だ。ポンプ隊員を経て、念願の救急車の機関員（運転手）になった。働く中で苦労したのは、睡眠時間が不規則になったことだという。

「現役時代、2軍選手はナイターがなかったので、早寝早起きの規則正しい生活をします。ところが、今の仕事は24時間体制。まとまった仮眠が3、4時間取れたらいい方です。睡眠に対するストレスには今も苦労しています」

生活は一変したが、やりがいも十分に感じている。病院に搬送した方のご家族からお礼を言われることや、ときには、後日わざわざ消防署まで来て感謝の言葉をかけられることもある。この仕事に就いてよかったと感じる瞬間だ。

「緊迫した現場も多いのですが、やりがいがあります。今後もずっと続けていきたい。そのためには、当たり前のことを積み重ねるしかありません。事故を起こさず安全に、そして安静に患者さんを病院にお連れするのが、僕の最大の役割。これを継続していくことが目標です」

職場での人間関係も良好だ。コミュニケーション能力に長けていることも要因の一つだろう。それぞれの性格によるかもしれないが、プロ野球界に身を置いた人間ならば、自然と身に付く特性なのかもしれない。

「プロに入ると、20歳くらいの方と一緒にプレーしたり、外国人投手とバッテリーを組んだり、コーチ陣が入れ替わることもあって、幅広い年齢層のいろんな人と接する機会があります。性格なんて十人十色。野球を通して、常に多くの人とコミュニケーションを取ってきました。プロ野球選手だった強みを感じることはそれほどありませんが、密にコミュニケーションを取ることは、今の仕事に活かしているのかなと思います。救急隊は3人のチームで活動するので、しっかりと対話することで、うまく回っていると感じますね」

夢に向かってひたむきに走ってきた荒張だが、決してはじめから自信があったわけではない。

「プロの世界は、僕にとって贅沢な環境でした。野球に打ち込める素晴らしい環境を作ってもらった中で、結果を残せなかった。ケガもあったし、実力不足も痛感した。子どもの頃から野球一筋だったのに、プロでは通用しなかった。それと同じように、別の世界に飛び込んでも通用するかはわからない。最初から成功しようと気負わなくてもいいと思ったんです。ただ、通用しなかったとしても、やっていかなければならないという覚悟は持っていました」

実に冷静だ。自分自身を客観視できている——そう投げか



けると、「いやいや」と大きく首を横に振る。

「現役時代はできていませんでしたよ。自分の能力を見誤って、正捕手になりたいと思っていましたから。今振り返ると、当時の僕の能力ならば2番手や3番手のキャッチャーで、右の代打として勝負する。そんな道もあったかと思います。夢を大きく持つのは、もちろんいいことです。レギュラーを目指すのも当然。子ども達や若い選手にはそうであってほしいし、僕もそうでした。でも、ある程度の年数を重ねると、変わってきた。子どもが生まれてからは、なおさらです。もしも家族がないときに戦力外通告を受けていたら、僕は今ここにはいません。家族の存在は大きいですね」

人生の分岐点に立ったとき、自分の置かれている立場によって、選択肢は変わってくるはずだ。両親や兄弟、パートナーや子どもの存在が大きく関わってくるだろう。家族のため、自分のため、そして充実した明るい未来のために、様々な可能性を探ってほしい。自ら選択肢を狭めずに、視野を広く持ってほしい。新たな目標が見つかれば、荒張のように「苦痛だった」という勉強も乗り越えられるのではないか。

「野球をやりきったと感じるタイミングは人それぞれ。身体が動かなくなるまでやる人もいるだろうし、もうこれ以上は無理だと感じたら、それで十分なんじゃないでしょうか。今は野球選手になれてよかったです。チームメートだった大谷翔平のこと、いまだに周囲から話しかけてもらいますから（笑）。苦しかったけど、楽しかった。引退後のこと、不安に思う気持ちはわかりますが、僕でもなんとかやっているので、現役の皆さんなら、きっと大丈夫ですよ」

いつか訪れる第二の人生への一步を、自信を持って大きく踏み出してほしい。



上司にも

Interview



荒張さんの上司

東京消防庁 大井消防署 消防係長兼2部大隊長
消防司令 小原 仁さん

周囲に自然と人の輪ができる人柄 信頼できるチームを作りたい

私が大井消防署に来たのが2020年12月ですので、荒張くんの方が先に働いていました。大隊長といって、現場に行く部隊の責任者をしています。荒張くんのいる救急隊や梯子(はしご)隊、ポンプ隊などをまとめます。

荒張くんに会う前から、元プロ野球選手の職員がいることは聞いていました。プロ野球選手は初めてでしたが、うちの職場は元スポーツ選手がけっこういます。私もスポーツ好きなので、楽しみにしていました。身体は強いだろうと思っていたし、能力に関して不安はありませんでした。初めて会ったときは、身体は大きいけど意外に腰が低いなという印象でした。

一緒に働いて感じたのは、落ち着いているということ。隊長に頼りがちな人もいますが、プロ野球選手として、自分の身一つでやってきたんだなと感じることができます。責任感を持って動いてくれるので、とても助かっています。例えば、指令が流れながら場所を確認して出動する

のですが、ときにはわかりづらい指令や道が複雑なこともあります。人によってはそのまま行ってしまったり、隊長に言われるがまま出発したりすることもある。でも荒張くんは、救急の機関員(運転手)として責任を持ち、自分が納得できるまで確認して現場に向かいます。信頼できる存在です。

それに、関西のノリもあって、話が非常に面白い。彼の周りには自然と人が集まるんですよね。異動してきた人に対しても、元プロ野球選手の立場を使って楽しく話してくれる。それで周りも興味を持って、うまくコミュニケーションが取れている印象です。職場にいい影響を与えてくれていますよ。救急隊として傷病者やそのご家族と話すときと、職場でのリラックスしたときの話し方を使い分けている。緊張感のある現場と、しっかりメリハリをつけられるのもいいですね。また、彼は現場での対応も上手なんですよ。小さい子どもさん相手でもうまく話せるし、お年寄りの方だと親身になって話している。私が見習いたいくらいです。

うちは階級があって、だんだんと部下が増えていきます。彼には早く部下を持ってほしいと思っています。部下を持って隊長になれば、「チーム荒張」としての特色が出せます。傷病者を安全に病院まで送り届けるスキルをしっかり磨いて、ご家族への対応も丁寧にできる。現場で活躍でき、信頼されるチームを作る側の人間になってほしいと期待しています。

救急隊は昼夜関係なく働き、仮眠を取っていても起きなければならぬ状況が多くあります。それは精神的にきついかもしれません。でも、どの仕事でもしんどいことはあるでしょう。希望して入庁してきたので、乗り越えなければならないことだと思います。仮眠の時間帯に出動すれば、その分の手当が出ますし、公務員としての制度はしっかり整っています。長時間勤務で体調管理も重要なになってきますが、スポーツ界でやってきた人ならきっとやれるはず。頑張ってもらいたいですね。

公務員試験という響きで、ハードルが高く感じてしまうかもしれません。勉強すればなんとかなると思います。身体は丈夫だと思うので、あとは知識を身につけてください。プロ野球選手には適性があるはずですから、ぜひこの世界に飛び込んできてほしいと思います。

東京消防庁で 働いてみませんか？



東京消防庁 人事部人事課
募集担当係長 消防司令
笹本 なつみさん

これまで30歳未満だった受験資格が、今年から36歳未満になり、適性検査(SPI3)での試験も実施しています。大学を卒業していないても受験可能です。スポーツをされていた方はフィジカル面もメンタル面も強いので、適性があると思います。ぜひ、セカンドキャリアの選択肢の一つに加えていただけたらと考えています。

- ◆受験資格 【I類】次のいずれかに該当する人
 - ①22歳以上36歳未満の人
 - ②22歳未満の人で、次の(1)又は(2)に該当する人
 - (1)学校教育法に基づく大学(短期大学を除く。)を卒業している人
 - (2)(1)と同等の資格を有する人
- ◆職務内容
 - ・火災等の防除・鎮圧、救助、救急等
 - ・都民生活の安全確保、要配慮者の安全確保、消防広報等
 - ・消防車両・機器の整備等

※詳しくは東京消防庁の採用試験(選考)案内をご確認ください。

将来を見据えて社会人野球へ 学ぶ姿勢を忘れず仕事に向き合う

関西学生野球連盟2024年春季リーグで、京都大学は史上最高タイとなる4位の成績を収めた。チームを率いるのは、近田怜王。報徳学園高から2008年ドラフト3位で福岡ソフトバンクホークスへ入団した左腕だ。

「子どものころから、プロ野球選手になることが目標でしたが、もっと先の将来は指導者になりたいと考えていました」

プロに在籍したのは4年間。2軍での登板を重ねて1軍昇格を目指すも、2012年に戦力外通告を受ける。翌年、活動を再開したJR西日本へ入社し、都市対抗野球にも出場するなど3年間プレーした。2017年からは社業と並行して、京都大野球部の指導に当たる。ボランティアでコーチをしていたが、2020年9月にJR西日本の出向扱いで助監督に就任。そして、2021年11月から監督として指揮を執る。

「ホークスで戦力外通告を受けてから、通信制の大学で高校の教員免許を取得しようと考えていました。そんなとき、JR西日本の総監督をされていた後藤寿彦さんからお声掛けいただいた。指導者を目指すのであれば、社会人野球でもプレーすることで、経験値を高め将来にいかせるのではないか、と。そこで、まずはJR西日本で野球を続けることにしました」

野球部は2005年から活動を休止していた。集まった選手は大卒の同級生や高卒の若い選手ばかり。活動再開1期生として、セカンドキャリアをスタートさせた。

「会社の方々は温かく迎えてくださいました。元プロ野球選手ではなく、一社員としてフラットに接してもらえたので、やりやすかったです。肩肘張らず、楽しく働くことができました。駅員としての仕事も同じです。野球人としてではなく、駅員としてお客様と接する。それが新鮮で、会話を楽しむことができました」

近田の人懐っこい性格と、仕事に真摯に向き合う姿勢が受け入れられ、「楽しむ」ことに繋がったのだろう。だが、野球から離れたわけではない。プロの世界に未練はなかったのか。

「他の選手に比べたら足りなかったかもしれません。僕の人生ではプロに入ってからが一番、努力をした時期でした。それでも、実力では敵わなかった。通用しないと感じたから、踏ん切りをつけられたのだと思います。そうして、新しいことを学ぼうとJRに入社しました」

現役を引退した翌年は社業に専念した。そして、職場の上司であり、京都大野球部で監督経験のある長谷川勝洋さんから指導を要請され、京都大学へと足を運ぶことになる。



04 京都大学 硬式野球部監督

近田 怜王さん

Reo Chikada

福岡ソフトバンクホークス

2009-2012

1990年4月30日生まれ。兵庫県出身。報徳学園高から2008年ドラフト3位で福岡ソフトバンクホークスへ入団。2012年途中に外野手へ転向し、シーズン終了後に戦力外通告を受ける。翌年からJR西日本へ投手として入社し、3年間プレーした。2017年から社業と並行して、京都大野球部の指導に当たる。コーチ、助監督を経て2021年に監督就任。



指導者としてのやりがいを実感 学生とともに成長し続ける

近田が現実的に指導者を目指したのは、中学生からSNSで質問を受けたのがきっかけだ。「どんな練習をしたらいいですか」などの問い合わせに、自身の経験を踏まえて回答するのが楽しかった。社会人野球に進んだことで、教員免許の取得はしなかつたが、違った形で指導者としての第一歩を踏み出した。

「大学野球の経験がないので、はじめは自分が携わっていいのかなという思いもあった。でも、やったことのない分野でどれだけ通用するか、また勉強ができるのではとも思いました。ただ、京大生は言語化能力が高い。初日から色々と質問され、それに答えるのに必死でした」

相手は、東京大学に肩を並べる日本の最難関国公立大の学生だ。野球での経験値が上とはいえ、はじめは苦労した。例えば、「打つためには〇〇の筋肉をどう使ったらいですか?」、「この動作にはどの関節が作用していますか?」と、選手は目を輝かせながら聞いてくる。

「これはやばいと思いましたね。プロでも知識が豊富な人はいましたが、当時の僕には即答できなかった。筋肉を名前で説明したことなんてありませんでしたから」

回答できなかった質問は持ち帰り、次回までに準備する。近田が素晴らしいのは「僕も指導者として成長できるチャンス」と言えるところだ。本もたくさん読んだ。技術的なものではなく、ほとんどがビジネス書。理論立てて説明することで、学生にも伝わりやすい。相手が言語化能力に長けているのなら、自分が追いつくしかない。近田も一緒に成長していった。コーチから助監督、そして監督へと立場が変われば、仕事内容も変わり、多忙を極める。

「今も技術指導はしますが、監督になるとマネジメントが加わります。午前中は事務作業がメインです。出場機会のある程度均等にするためのデータ管理や、社会人チームへの練習参加依頼の連絡。そして午後から練習します。選手起用における気配りも重要です。本当は使いたいけど、勝つためには……と、時期によって優先順位が変わってきますからね」

言葉とは裏腹に、表情はどこか楽しそうにも見える。練習中のグラウンドを覗くと、学生と積極的にコミュニケーションを図っていた。学生も委縮することなく、距離感が近い。

「監督ですが、そこまで年齢は離れていないし、経験も少ない。だから、彼らの意見がヒントになることもあります。自分の考えを押しつけるのではなく、彼らの考えを聞きながらチームを作り上げていきたい。例えば、サインの出し方。選手がサインを見落としたとき、まず見にくかったのかを確認します。見えなかつたのか、こちらのタイミングが早すぎたのか。『僕の勘違いでした』と言われたら、じゃあそれはやめようという話をします」

選手に寄り添った指導で、チームは着実に力をつけていく。こんなにも前向きに取り組める近田に、どうすれば悔いのない野球人生を送れるのかを尋ねた。

「競争の激しいプロの世界では、周りを押しのけてでも自分が活躍するんだというスタイルでやるべきだと思います。現役中の僕は、それができなかつたのが反省点です。それから、もっと先輩に質問していればよかった。技術を盗むこともそうですが、社会に出てからのコミュニケーション力という面でも、受け身にならず積極的に情報収集することが大事だと



思います。先輩だけでなく、トレーナーさんなど、野球以外の世界を知る人との会話もためになるはず。治療を受けているときに話すのもおすすめです」

さらに、現役生活で身につけた一番の強みは何か。

「当たり前のことがですが、挨拶です。プロに入って初めて齊藤和巳さんに食事に連れて行ってもらったとき、なぜ挨拶が大事なのか、目配り気配りについても教えていただきました。挨拶はコミュニケーションです。元気に挨拶できるのが一番の強みだと思います」

当然のことだと思われるかもしれないが、「元気に」というのがポイントだ。社会人野球でも駅の業務でも、指導者となつた今にも繋がっている。さて、人生100年時代とも言われる昨今、すでにサードキャリアに突入している近田だが、今後の展望はいかに。

「指導者をずっと続けていこうとは思っていません。どんどん新しい人が出てきて、入れ替えができた方がいいと思います。30歳から監督をさせてもらいましたが、次の世代がやりやすい環境を作っていくたい。指導する立場の人にも様々な不安があります。まだ具体的には見えませんが、そういう人を支える役割を担えたらと考えています」

そして最後に、現役選手へ向けてこう付け加える。

「毎日練習していればしんどいこともあります、コーチや球団スタッフさんなど、活躍するために真剣にサポートしてくれている人がいることを忘れないでほしい。感謝の気持ちを持って取り組んできれば、うまくなるチャンスが転がっているはずです。それから、プロ野球選手を求めている企業がたくさんあることも覚えていてください。緊迫した真剣勝負を繰り広げた経験は、別の世界でも必ず役立つ。だから、怖がらずに何にでもチャレンジしてほしいと思います」



上司にも Interview



近田さんの上司

元京都大学硬式野球部監督 長谷川 勝洋さん

お伺いします!

妥協のない世界で生きてきた人は ビジネスでも成功できる

近田がJR西日本に入社することになったのは、総監督をしていた後藤寿彦さんの声掛けによるものです。彼が報徳学園高でプレーしていた頃、後藤さんが甲子園で解説をされていて、当時のことを覚えていたそうです。そこで「ホークスを辞めるなら、来てくれないか」ということで、JR西日本野球部再スタートの1期生として入社してくれました。後藤さんの声掛けがなければ、働きながら勉強して教員免許を取ろうと考えていたようです。それがもう一度、社会人で野球をすることになった。やはり縁は大事ですね。当時から、一人だけ目つきが違っていたのを覚えています。

その後、都市対抗野球大会にも出て活躍してくれました。野球部のある広島で勤務していましたが、引退してからは神戸市の三ノ宮駅所属になりました。現役を退いてから1年が経とうする頃、各現場の取り組みを発表する会がありまして、彼はその司会をしていました。その後の懇親会会場で久しぶりに再会し、挨拶に来てくれた。将来は野球の指導に携わりたいと聞いたので、「だったら休日に京大野球部の指導に行ってくれないか」と打診しました。私は以前、京都大学の監督をしていたこともあり、その後もチームに関わっていました。関東のリーグではプロ経験者が指導をする機会が多いのですが、京都大学では過去に例がありませんでした。しかも、学生と年齢の近

い指導者はいなかったので、近田にお願いしました。

はじめは「自分は大学に行っていないのに、いいんでしょうか」と言っていましたが、続けられないと思ったら無理をする必要はないと言いました。学生に対しても同様です。この人に教えてもらいたいと思えなかったら、遠慮なく声を上げてほしいと話しました。学生からすれば、子どもの頃に見た甲子園のスター。どんな反応をするかと見いたら、練習後にアドバイスを求めてくる学生が何人かいきました。私が同じことを言っても響かなかったのに、学生たちが目を輝かせているんです。自分の考えを押しつけない近田のスタンスも合っていたんでしょうね。はじめから、学生の反応はよかったです。

月に一度くらい、時間のあるときに巡回コーチをしてくれたらと考えていましたが、夜勤明けの非番の日に三ノ宮から京都まで来てくれました。本来なら、眠たくて仕方ないはずなのに、ボランティアで自分の時間を使ってまで来てくれた。そうした彼の姿には本当に感謝しています。

2020年からは、会社の理解を得て出向扱いとなり、助監督になりました。監督になった現在もJR西日本の社員でありながら、地域貢献という位置づけで京都大学に行ってもらっています。これは異例ですね。彼の経歴とそれまでの仕事ぶり、人柄がそうさせたものだと思います。とにかく周囲が応援したくなる性格なんですよ。監督になってからは苦労も増えるだろうと、私が相談役のような立場になろうと考えていました。でも、監督デビューの開幕戦でいきなり勝利を挙げたんです。私は苦労していたのに、すでにその何倍も勝利しています。近田はコミュニケーション能力が高い。試合後のミーティングでは、なぜそうしたのかプレーの意図を学生に確認しています。学生のレベルに合わせて、フィードバックするので理解も高まるのでしょうかね。プロ経験者だと説得力もあります。

私は厳しいプロの世界でやってきた人なら、野球の指導者であろうとビジネスの世界であろうと、輝けると思っています。ただし、人としての影響力は必要です。もし近田が野球から離れて、「JRマン」としてやっていきたいと思うのなら、それでも絶対に成功するはず。同僚は野球だけでなく、仕事ぶりを評価してくれましたから。先輩から可愛がられ、後輩からも慕われる性格です。

社会人からプロを目指す選手も多いですが、こんなことを言っている選手がいました。「都市対抗は1万人くらいの観客の中で試合をしますが、それだけでどっと疲れます。プロはそれが毎試合だし、結果が出なくても翌日にはまた試合があるなんて大変ですよ」と。やはり、選び抜かれたスター集団だなと改めて実感しました。社会に出て、パソコンが操作できないかもしれないなんて不安になることはありません。いざというときの瞬発力、長丁場での持久力。仕事ではその両方が必要ですが、プロ野球選手は持ち合わせていると思います。プロ野球選手になるための努力をしてきたのだから、ビジネスでも正しい努力をすれば必ず成功する。それを必要としている会社やチームも多いはずです。一つのことを極めた人間を応援したいと思う人は山ほどいますから。近田にも、今後ますます活躍してもらいたいと思います。